

従来の枠組みを超えた 言語現象の解明に取り組む



文学部英文学科助教授
おてき
榎木 勇作

【学歴】
1994年3月 名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程中退

【職歴】
1994年4月 愛知淑徳大学文学部専任講師
2000年4月 愛知淑徳大学文学部助教授
2000年9月～2001年8月
米國ハーバード大学大学院言語学科客員研究員



ハーバード大学で、チョムスキー博士と

【最近3年間の研究業績リスト】

- "Scope interpretation principle in derivation by phase" *EVERGREEN* 23, 37-57. The Society of English Literature, Aichi Shukutoku University 2001年(単著論文)
- "Unaccusative Analysis of Psych-verbs in Wh-quantifier Interactions in Japanese and English" *Linguistics and Philology* 21, 11-32. Nagoya University 2001年(単著論文)
- "Three Types of Scrambling and Interpretation" 『愛知淑徳大学論集』第27号, 27-39 愛知淑徳大学 2002年(単著論文)
- "Raising to Object Constructions" *EVERGREEN* 24, 17-34, The Society of English Literature, Aichi Shukutoku University 2002年(単著論文)
- "-friendlyの形態論" 『愛知淑徳大学論集』第28号 29-41 愛知淑徳大学 2003年(単著論文)
- "Antecedent-Contained Deletion and Phrasal Movement in LF" *IVY* 36, 63-82 The Society of English Literature and Linguistics, Nagoya University 2003年(単著論文)

榎木先生の専門は英語学で、文、語、句の構造や体系、またその中に隠されている規則性等を研究する意味論や統語論などを通して、言語現象の解明に取り組んでいます。

3年前のアメリカ留学では、ハーバード大学大学院で最先端の研究に触れたほか、マサチューセッツ工科大学(MIT)では言語学の世界的権威、トムスキーのレクチャーを受けたりと、とても刺激的だったそうです。帰国後はその経験を踏まえ、昨年10月の「先行詞内包動詞句削除」の解明に臨んだ論文等を次々と発表。今後は、既存の枠組みにとらわれない独自の理論を構築し、今の言語現象を説明したいという抱負を持つ一方、これまで培ってきた英語学の知識を、教育の現場にフィードバックしていきたいとのこと。

大 学の学部時代から英語学をずっと研究してきました。まだまだ自分なりの研究スタイルが見えてこないなと感じています。学部2年生で英語学研究室の門を叩いたときは、訳の分からない理論の世界に圧倒されまくっていました。その体系的精緻性に驚愕しました。ちょうど1950年代後半から始まったNoam Chomskyの生成文法理論が、拡大標準理論から、GB理論を経て、現在に至るミニマリストプログラムへの移行期にさしかかる頃でしたので、他の学問領域に負けないくらいこのスピードで理論が変わっていくのを実感しました。ですから、Chomskyを始めとする主要論文はほとんど未出版のドラフトをいち早く入手して、言語現象の説明に挑むという大学院当時からやり方は今も変わっていません。

3 年前に、本学の長期研修制度で留学し、MITでChomskyの講義を受けることができたのは実に感動でした。常に未出版・未公表の持論を授業で展開し、オーディエンスとして参加している多数の専門家(多くはMIT出身の研究者)の批評と闘い、最終講には「Working Paper」としての体をなすに至る論文に仕上げられ、さらには「メンボーション」です。ですから、Chomskyのレクチャー以上に、文献でしか知らなかった著名研究者が目の前でChomskyと議論しているさまが、いかに圧倒されるものでした。

一方所属していたHarvard大学大学院は、独自のペースで幅広い視野からさまざまな研究が集積されていくオリジナリティを持っていて、生成文法理論のみに傾倒することはありません。その両方の環境にいたので

コミュニケーション学部
コミュニケーション心理学科
教授 清水 遵



風の薫り

慢性的な運動不足とアルコール充足のせいなのであるうか、このところ着実に体脂肪率が上昇してきた。このままでは衣替えの時期に毎年服を新調しなくてはならない。運動不足を解消し体型変化による出費を抑えるべく、休日にはできるだけ近所の緑地公園を歩くようにしている。

行き先の当てもない散歩中にと感ずるのは風の薫りである。特に季節の変わり目の風の薫り、それがキンモクセイの甘い香りであれ、雨上がりの土の匂いであれ、風に運ばれてくるほのかな薫りに何ともいえない穏やかな心持ちになる。それは過去の記憶が具体的に蘇るからではなく、あくまでも漠然と

した肯定的な感情なのである。われわれの五感のうち、嗅覚刺激だけは感情発現の中核である大脳辺縁系に直接入るので大脳皮質での知的分析を受ける前に感情が惹起される。ほのかに感じる香り刺激は穏やかな感情を、1/f ゆらぎをもつ自然の風は快適感を生み出す。散歩の途中で出会った風の薫りに表現し難い肯定的な気分を感じるのには、このような脳のメカニズムによるのだろう。

いわゆるアロマセラピーブームに乗って、必ずといっていいほどデパートには様々な精油を売るコーナーがあり、高価な精油が結構売れているという。最近では「酸素ハー」と称する店で酸素まで売られている。

確かにストレス社会といわれるこの時代、疲弊した心と身体を癒すことは誰もが望むことであり、そのための商売が繁盛するのは必然であらう。

ただ、この種の行きすぎた商売には少なからず違和感をもっている。穿った見方かも知れないが、そこに日常のストレスに対する我々の感受性を意図的に高め、必要以上に不安に駆り立てる商魂を感じさせる場合があるからだ。高いお金を払っても、人工的な香りや酸素を買っても、天然のいい日以外に出て風の薫りを感じることの方がよほど癒されると思うのは、猜疑心の強いひねくれ者の私だけだろうか。

著者自らが
近刊を紹介します。



「エマージング株式市場のファンダメンタル分析」
コミュニケーション学部ビジネスコミュニケーション学科助教授
渡辺泰明

A4判/101ページ/株式会社プリンテック/1,450円+税/2003.12.1発行

本書では、日本人投資家の視点に立ってエマージング株式市場はどのように評価されるべきかを定性的・定量的なアプローチに基づいて分析を行った。

第1章;エマージング株式市場のファンダメンタル分析、第2章;エマージング株式市場の収益率の予測可能性とボラティリティ変動の推定、第3章;エマージング株式市場における平均分散分析の拡張からなっている。



「自分づくりの文章術」

文化創造学部教授 清水良典
新書判/219ページ/ちくま新書/700円+税/2003.8.10発行

「小説」や「エッセイ」などの、既成のジャンルを超えて文章を書くこと、読むことの普遍的な価値観を、「純文章」と本書は名づけます。独創的で多様な文章作品の魅力を鑑賞するとともに、誰でも楽しく文章を書ける実践的な方法と考え方を、たくさん紹介しています。文章を書くことは自分を「つくる」ことです。本書を読んで、新しい「自分づくり」を始めてください。

今までの自分の研究スタイルを見つめ直すきっかけになりました。

言語 語理論の理論としての整合性・経済性を追求することに奔走していたこれまでの言語能力 (language competence) 一辺倒の研究から、その使用者が人間であるという言語運用 (language performance) の側面をも視野に入れた研究へ動き出すとしています。あくまで理論をベースに言語現象を見つめるスタイルは変わりませんが、コーパス・大規模言語データベースを使用したり、映画のセリフから独自のアー

タペース構築へ着手したり、機能主義の側面からの考察を加えたりして、今後それらを集結させて、多角的な言語研究ができればと思っています。

* 生成文法理論
1950年代後半からNoam Chomskyを中心として発展してきた言語理論。人間の生得的な言語能力(普遍文法)を明示的に記述・説明することを目標とする。当初の標準理論から1970年代の拡大標準理論、改訂拡大標準理論、GB理論を経て、現在に至るミニマリストプログラムへと、その理論的枠組みは、理論内の整備・上位概念の統合化によって変遷している。